

日本温泉文化の原点 一遍上人の道

～ダイバーシティ温泉の魅力～

別府大学

学長 飯沼 賢司

1 はじめに

今日は、「日本温泉文化の原点 一遍上人の道～ダイバーシティ温泉の魅力～」をテーマにお話します。このテーマいったい何なんでしょうか。最初は違うことを考えていたのですが、このテーマで話してほしいと広報室から厳しい方針が示され、今回はその方針に沿って講義を組み立てました。スライドにある「一遍上人」「油屋熊八」「別府“温泉”大学」の3つをつなげてお話します。

さて、「別府は日本温泉文化発祥の地」。そんな怪しいことを言っているのか、私も首をかしげるところです。日本最古級の温泉といえるのは道後温泉です。あと有馬温泉も古いです。どっちが古いかは議論になりますので、あえて最古級とします。しかし、道後温泉はこの別府温泉の温泉を引いてできているということは有名な話です。また、一遍上人は伊予の道後のあたりの出身で、上人ヶ浜に上陸して鉄輪に来たという伝説もあります。そのようなことから、「上人ヶ浜～鉄輪の道は、日本温泉の聖なるライン」だと。さらには、「そのどまん中に別府大学があるのだから、日本に、世界へ温泉文化を発信する。これが別府“温泉”大学である」と、広報室が打ち立てたんですね。広報というのは非常にコワイですね。その広報の口車に乗せられる学長はもっと恐ろしいのですが（笑）。

まず、別府の温泉の多様性についてお話します。まず泉質の豊富さ。10種類の泉質のうち7種類が別府にある。こんなに種類がある温泉地は他にありません。



飯沼賢司学長

それから、温泉の利用の仕方も多様です。入湯ということでも、個人宅の内湯から共同湯、宿の湯とさまざまです。蒸し湯という形態もあります。サウナとは違い、温泉の蒸気を利用するのは珍しい。さらに、観光として「地獄」を見学したり「湯けむり」の景観を楽しむことができます。また「湯の華」などの温泉を活用した産物も作っている。温泉の蒸気を使って「地獄蒸し」料理もする。地熱で発電もできる。

宿のスタイルも多様です。鉄輪には十数件の湯治宿があります。都市部で、湯治宿が生き続けているのは極めてまれです。旅館、ホテルもあり、近年高級リゾートホテルもできました。

人材の多様性では、今日お話をする一遍、熊八などにはじまり、他地域から来た人たちが別府を開発してきました。そして、よそ者たちが別府に新しい風を起こし、文化が非常に多様になりました。別府には、何でも受け入れる雰囲気があります。そこはまず押さえておく必要があります。

2 風土記と一遍上人

「風土記」というのは、713年に元明天皇が日本全国に命じてその国の産物や風土、伝承などを報告させた、古代の報告書です。『豊後国風土記』には、温泉があったと書いてあり、その一つに「赤湯」というのが出てきます。郡（こおり）の北、竈山の近くにある赤湯と書かれているのでこれはまちがいでなく、血の池地獄でしょう。

「玖倍理湯（くべりゆ）」というの、郡の役所の西、河直山（かのうやま）の東にある、と書かれており、現在の鉄輪は「かのう」といわれており、江戸時代になって「鉄の輪」と当て字になり、最初から「鉄輪」ではなかったんですね。そこには間欠泉があって、そのため「慍（いかり）湯（ゆ）井」といい、俗に「玖倍理湯井」といったと記述されています。

当時の光景は、江戸時代に描かれた「鶴見七湯廻記（つるみしちとうのき）」によるともくもくと煙が出るような地獄の風景が広がっていました。人が簡単に住めるような場所ではなかったと思われま。

豊後国風土記の中には、こんな記述もあります。この山の一つの峽（を）、崩え落ちて、慍（いかり）る泉、処々より出でき。湯の気は熾（さか）りて熱く、飯（いひ）を炊（かし）ぐに早く熟（な）れり。

日田の奥のほうの五馬山（いつまやま）というところの話で、多分天瀬のことを言っているんだと推定されます。今の地獄蒸しのような方法が風



鶴見七湯廻記（所蔵：大分県立歴史博物館）

土記の時代からあったということ推測できます。

ではここから一遍上人の話をしていきましょう。別府が、なぜダイバーシティ温泉と言えるのか、ダイバーシティというのは多様性ということです。いろんなところから人が集まって来て、あちこちの人が知恵を出し合って温泉を開発しました。一遍はその一人です。

一遍は四国から渡ってきて、豊後府内（現大分市）の大友頼泰（大友領の惣領）に会います。一遍は時宗の開祖ですが、ここで他阿（たあ）という人物と出会います。他阿は浄土宗の僧侶でしたが、一遍の宗教家としての才能を認めて時宗に帰依します。この帰依によって大友頼泰は一遍を支援するようになります。

そして一遍は、大友氏が地頭職をもつ別府の鶴見村の鶴見権現を訪れます。権現は、山を信仰の対象にして、山中に上宮、中宮、下宮があり、鶴見権現の下宮が火男火売神社になります。「鶴見七湯記」の中にも往時の鶴見権現として、大変立派な神社が描かれています。

「一遍上人年譜略」の中には、鶴見嶽のかたわらに温泉あり、これ熊野権現の方便の湯なり

と書かれています。一遍は、「温泉」（鶴見の湯）の権現宮にあった社頭の楠木に名号を小刀で刻み、「別時念仏」を行ったと記しています。熊野というのは実は、温泉なのです。

平安時代末、白河・鳥羽・後白河の法皇たちは、熊野詣で行います。なぜ、熊野詣でに行くかということ、身体を再生するため、要するに温泉に入りに行っていたのです。熊野の本宮から入ったところに温泉があります。方便の湯というのは、温泉のことを指していると考えられます。

鉄輪の風呂本に「永福寺」という寺がありますが、もとは一遍上人が開いた寺で当初は「湯滝山松寿寺」でした。この寺院は廃絶・再興を繰り返して、明治24年（1891）に尾道の永福寺の寺号をもらい、時宗の寺として再興された。松寿寺というのは、一遍の童名が松寿丸であったことに由来しています。そしてお寺の近くに温泉神社があり、そこに祀られていたのが「大巳貴命（おおなむちのみこと）」「少彦名命（すくなひこなのみこと）」

の二人です。

ここで『伊予国風土記』を見てみましょう。『伊予国風土記』は、『豊後国風土記』のように多くの部分が残っているのではなく、断片的な引用文が残っているだけです。その中にこんな記述があります。

少彦名命と大国主命が伊予の国を訪れたとき、少彦名命が病で倒れ仮死状態となります。それを嘆き悲しんだ大国主命は、豊後水道の海底に長い管を敷いて、速見の湯（別府温泉のこと）を道後へ運び、少彦名命を湯浴みさせたら病気が回復したというのです。

ということは、道後温泉の源泉は実は別府温泉なんです。そこから、別府は道後温泉より古く、日本最古の温泉、温泉文化発祥の地といえるのではないかという仮説が出てくるわけです。

道後温泉には、聖徳太子が病氣療養したということが『伊予国風土記』逸文に書かれています。聖徳太子の来湯について書かれた碑文があるとされていますが、見つかっていません。

14世紀に、道後温泉の近くに河野氏が築城した「湯築城（ゆづきじょう）」の城跡があります。一遍は河野氏一族として、道後の近くで生まれています。ですから、道後温泉については一遍はよく知っていたでしょう。

布教のために最初にやってきたのがなぜ豊後だったのか、大友氏との関係もありますが、道後温泉のルーツである「速見の湯」にぜひ行きたいと思っていたのではないのでしょうか。道後温泉が古い温泉だということは、色々なところで出てきます。日本で最古と断定することはできませんが、最古級といえます。その道後温泉は、速見の湯を引いたことから始まったのであれば、最古級の温泉より先にあったことから、別府の温泉は日本最古と言えるのではないのでしょうか。

さて、一遍は鉄輪の地獄を鎮め、湯治場を開いたと言われていますが、史料がなく伝説となっています。江戸時代には、そのような伝説が出来上がっています。一遍は、四国の伊予の名族河野氏出身であり、道後温泉と密接な関係を持っています。鉄輪の温泉神社の祭神が四国の道後温泉の祭神と同じであることは注目する必要があります。

伊予の僧一遍が別府（速見）温泉の価値を見出したことで、鉄輪の温泉の歴史は始まりました。このようなことから、一遍が辿った道後温泉から鉄輪に続く道は、「温泉文化発祥の聖なるライン」であると言えるのではないのでしょうか。

③ 新しき一遍、熊八の登場

続いて、油屋熊八に迫っていきましょう。熊八も一遍と同じく四国の宇和島出身です。「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチコピーで別府の名を全国に広めた別府観光の父であります。

熊八は文久3年米屋の息子として生まれます。熊八青年は、一旦は家業を継ぎますが、明治25年に大阪へ行って時事新聞の経済担当の記者になります。それがきっかけとなり、株に手を出します。株の研究をしているうちに、株の仲買商人になり、油屋將軍といわれるほど金を動かすお金持ちになるのですが、あつという間に破産をしてしまいました。廃業し、すってんてんになって、明治30年に渡米し、カナダ、メキシコを旅して、クリスチャンになりました。31年～43年は、謎の時代でこの間の活動は、明らかになっていません。

それから、奥さんの縁をたどって別府に移り住み、知人の紹介で明治44年に亀の井旅館を開業します。44年は、日豊線の別府駅が開業した年で、49年には大阪商船が大阪別府館間の航路就航が控えていました。熊八はここに商機を見出し「別府はいける！」という先見の明で別府に宿を開業しました。

大正バブルとともに亀の井旅館は発展し、大正3年に発行された日本全国の商工人名録には、亀の井旅館が記載されています。大正11年に旅館を改装してホテルにし、大正後期には



油屋熊八（写真提供：平野資料館）

別府一のホテルになったのです。チップを廃止、酒を飲ませない、など大胆な発想を打ち出していきます。

熊八は日本初のバスガイドを誕生させたこともよく知られています。「別府お伽倶楽部」の活動や鳥観図絵師の吉田初三郎によるパンフレット制作も注目すべきところですが、しかし、熊八の神髄は、なんと言っても文化人との連携です。与謝野晶子・与謝野鉄幹などなどさまざまな文化人を別府に招き、別府について書いてもらうことで、評判を高めていくのです。

与謝野晶子との関係の深さについては、近年見つけた、亀の井ホテル20周年の催しのために下書きしたとみられる祝辞の原稿から窺うことができます（大分合同新聞2018年8月18日掲載）。熊八は、昭和6年に亀の井ホテルの20周年として「全国大掌大会」を開催し、与謝野晶子・鉄幹夫妻や、久留島武彦、天野雉彦（口演童話家）、江見水蔭（小説家）、土屋大夢（ジャーナリスト）を招いています。その祝辞として、与謝野晶子は、亀の井の20周年は国家の発展と平和を促す、外国人を呼び寄せる国際観光の拠点。熊八は賀川豊彦と並ぶ尊敬する人。「人が世に生きて行く最高の理想は、平和なる事業を以って他人を益しつつ、同時に自分もその事業を由って独立するという事」亀の井の事業はそれに合致している、など、どれほど謝礼を貰ったのかわかりませんが、辛口で知られる与謝野晶子がこれほどに褒めていることは珍しいことです。

ちなみに、本学の創設者、佐藤義詮は、東京お茶の水にあった文化学院大学の1期生で、与謝野晶子の教え子です。

熊八の事業は文化的な側面を持っており、童話を語る口演活動「別府お伽倶楽部」は、油屋熊八（ピカピカのおじさん）、梅田凡平（にこにこのおじさん）、原北洋（みずひきのおじさん）、宇都宮則綱（チャップリンのおじさん）などで結成し、別府の新しい時代を作ろうとしていました。さらに、日本全国から世界へを目指し、「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」のキャッチフレーズを梅田凡平が富士山に掲げたり、アメリカの日曜学校では、陣羽織を着た桃太郎の格好で別府を宣伝

したそうです。

吉田初三郎作のマップを見てみると、別府を基軸に大阪、その先に由布院、阿蘇、雲仙、長崎、博多から釜山、反対側は上海までつながっており、国際的な視野を持っていたことがうかがえます。熊八はこの時に、すでにインバウンド戦略を掲げていたのです。

そして、別府のお隣、由布院にもいち早く将来性を見込んで、金鱗湖の辺に、1万坪の用地を購入し、賓客を迎える亀の井別荘を建設しました。与謝野鉄幹・晶子、犬養木堂、藤田嗣治らを私費で迎え、接待した。これも熊八の観光戦略でした。熊八が誕生させた少女車掌（バスガイド）らも由布岳をさし、「山を越ゆれば由布盆地、四季山水の眺めよき、金鱗湖畔亀の井の別荘がある所です」と、由布院を宣伝しました。

4 新時代の別府とともに

熊八の発想力、行動力、宣伝のセンス、人間関係、流れ者のしなやかさ、キリストの博愛精神、そして別府への愛、地域の枠を超えた仲間づくり。これが別府の原点です。

それは、伊予からやってきた一遍以来の別府の伝統であり、ここを踏まえていかなければ、別府の発展はありません。地域の中で保守的に固まってしまっただけでは別府ではありません。いろいろなことを乗り越えていくしなやかな心、そういうセンスが別府の本質だということを考えていく必要があると思います。

今、別府は、新しい時代の幕開けの時代です。新しい時代が別府に訪れつつあることを、みなさんも感じているのではないのでしょうか。別府は停滞期がありましたが、長野恭紘市長が新しい試みをしています。そして、ハイクラスの国際ホテルの開業など、新しい動きが始まっています。

そういう中で、別府大学は別府“温泉”大学という、聖なるラインのどまんなかに行く「湯（ユ）ニバーシティ」として生まれかわろうとしています。温泉を掘り下げれば素晴らしい研究もできますし、素晴らしい連携ができます。そこを大切にしていけることが別府“温泉”大学だと思っています。